キーワード　井戸端サロン、空き家、尾道スタイル

特定非営利活動法人

尾道空き家再生プロジェクト

ミッション
尾道は、時代の流れと共に
古い歴史の面影は失われつつあります。
その一方、車の入らない斜面地や
路地裏には、古い家並みが
手付かずのままの状態で残っています。
私たちは空き家の再生事業を通して、
古い町並みの保全と
次世代のコミュニティを確立し、
誇りに思える尾道を後世に
引き継ぎたいと考えます。

設立年月　2007年7月（2008年7月NPO法人化）
メンバー数　109名
代表者名　豊田雅子

広島県尾道市三軒家町3-23
特定非営利活動法人
尾道空き家再生プロジェクト
TEL 080-6323-9921/0848-36-6603
（平日10:00～16:00のみ）
mail@onomichisaisei.com
http://www.onomichisaisei.com

下：改装した元洋品店の自作タイルで遊ぶ子ども達

◎私たちが行ったこと

私たちは、昭和30年代に建てられた元洋品店のレトロな空き家を、1年間かけて子づれのママ達が集えるサロンに再生しました。地域にはママ達が気軽に集える店が少ないので、野外や誰かの家でしかお茶をしながらおしゃべりをすることが出来ません。サロンには子どもとゆっくり過ごせる部屋をはじめ、ママ達の趣味を活かした教室のためのスペースや手づくり品の販売スペースを設けることで、子連れママの活躍の場も見出したいと思いました。

再生第一歩は、不要品の片付けからでした。この空き家は人ひとり通れるだけのスペースをのぞいては、タンスなどの箱ものが天井まで山積みになっている状態で、それをひとつひとつ選別し、使えるものはいったん移動させ、どうしようもない不要品をゴミ処理場

下：改修図面

尾道建築塾
身近な建築物への興味を誘引し、地域の建築に対する理解を深めることを目的に開催している、一般を対象としたセミナー。講座には、尾道の町並みを専門家とともに散策したり、ユニークな建物を訪問見学する「たてもの探訪編」と、再生現場で実際の作業を体験する「再生現場編」がある。

2008 年度の実績
第 1 期　たてもの探訪編 3 コース
参加者合計――――――――188 名
第 2 期　再生現場編 2 コース
参加者合計――――――――32 名
第 3 期　たてもの探訪編 3 コース
参加者合計――――――――61 名
第 4 期　再生現場編 1 コース
参加者合計――――――――― 9 名
総参加者数――――――――290 名

に運ぶ作業を繰り返しました。

この作業はママ達や学生達にも手伝ってもらいました。特に、完成後に最も利用機会が多いと思われるママ達には、あえて再生の初期段階から関わってもらうようにしました。

その後、板金屋さんや電気工事屋さんに専門的な工事をお願いし、大工工事と左官工事は DIY ボランティアをパパ達からも広く募り、本職の指導のもと作業を手伝ってもらいました。間取りを変えるための解体作業や床や壁の下地づくりなどを経験する事により、普段見る事のない建物構造の仕組みなども見ることができ、建築科の学生達にも勉強になったようです。

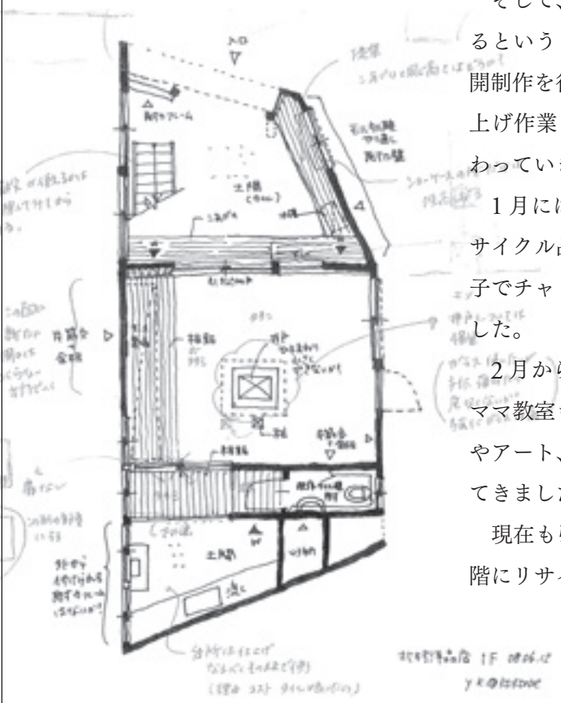
また、随時開催している尾道建築塾の再生現場編で、左官作業（外壁モルタル仕上げ、内壁漆喰仕上げ、ドイツ壁仕上げ、モザイクタイル貼り）や、木工作業（床板張り、外壁うろこ壁仕上げ、丸太天井仕上げ、廃材での縁側つくり）を一般の方も募集して一緒に行いました。小学生も親子で参加できる内容を盛り込み、老若男女が広く参加できるような仕組みにしました。

そして、最後に地元のアーティストや美術学生による「家をつくるということ。」というイベント形式による、アートの仕上げの公開制作を行いました。伝統的なフレスコ画の技法や現代アートを仕上げ作業に多く取り入れ、観るのも面白い不思議な家に生まれ変わっていきました。

1 月にはプレイベントとしてオープンハウスを兼ねた子供服のリサイクル品や手作りお菓子販売、ワークショップを組み込んだ「親子でチャリティバザール」を開催し、多くの方々に訪れてもらいました。

2 月からやっと通常営業を始めました。ママ達の特技を生かしたママ教室も定期的に行っています。各種料理教室をはじめ、縫い物やアート、美容、園芸などママを講師として様々なプチ講座を催してきました。

現在も引き続き、1 階をママ達の交流スペースとして解放し、2 階にリサイクル子供服のバザーコーナーやママの手作り品販売用貸



私たちが大切にしていること
ただ単に空き家を再生するだけではなく、そのプロセスを通して、建築を学んだり、関わる人同士のコミュニティを確立させる事を重視して活動しています。大変な作業も、アイデアや「お互いさま」という助け合いの精神で楽しく乗り越えていけるよう工夫しています。また、アーティストやモノづくりをする人たちとの交流も深め、彼らの活躍の場を提供していけるように心がけています。そして、「不便な暮らしの中に尾道らしさが潜んでいる」ということを、より多くの方々に理解してもらえるよう尾道らしさの発信に努め、全国的にも類を見ないような、エコでスローなコンパクトシティを目指しています。

空き家再生作業への呼びかけ方法
コアメンバーの友人、子どもの幼稚園のママ友達やそのご主人、そしてNPO の会員等、基本的に普段から関わりのある人に声をかけた。

しスペースコーナーを設け、子育て中のママ達が気軽に集える場所として毎日（平日 10 時～ 16 時　土日祝日不定休）運営しています。天候に左右されることが大きいですが、月に 3、4 回のママ教室がある時には、10 ～ 15 組位の親子がサロンを訪れます。近隣の方々からはお菓子やジュースの差し入れをいただくことも多く、良好な関係を保っています。

◎私たちが伝えたかったこと

建築的なハード面の再生よりも、そこに行き交うコミュニティや文化などソフト面の充実を大切に再生しました。再生プロセスを重視し、職人に丸投げするのではなく、参加者が DIY で出来る部分は自ら手を動かしたり、指導を受けながらトライできるように作業しました。ママ達から子ども、学生や興味のある一般の人たちまで、より多くの人が空き家の再生に関わる事によって、空き家の現状や作業の大変さや面白さを、実感してもらいたいと思いました。また、建物や尾道建築に愛着を持ってもらい、大切にしていく心も一緒に育む事が出来ればと考えました。

お陰で、作業に携わった人々の中には、自分の家を自分でリノベーションしたり、ちょっとした日曜大工が出来るようになった人もたくさんいますし、廃材や古道具の魅力に気づいた人も多くいます。そして、自分も家づくりの一部に参加したという気持ちで、完成後に何度も見に来てくれる子どももいます。

この空き家は特に廃材や不要品を色々なアイデアで活用し、尾道らしさを出来るだけ残し、生かしながら再生させていきました。古いものを安易に全部スクラップし新築に建て替えたり、完全に復元して保存するという方法以外に、古くてレトロな部分を残しながら古道具を上手く活用させた再生方法が、「尾道スタイル」として、尾道らしさを後世に伝える形式になればと思います。

自分でもやってみよう。
空き家再生作業参加者の声

尾道空き家再生プロジェクト

下：改修後の元洋品店

広島県尾道市三軒家町地区

下：改装中の様子

元洋品店の空き家
建坪 10 坪ほどの木造 2 階建ての元住居兼店舗（洋品店）。閉店後は物置代わりになり、取り壊す予定で約 20 年間にわたって放置されていた。長年の雨漏りによるシロアリ害で、躯体の痛みも進んでいた。傾斜のきつい三角屋根、タイルがびっしりと貼り巡らされた台所、木製の建具、床下から突如現れた大きな井戸がこの家の特徴。コアメンバーが、建物としての魅力や再生活用の意思を伝え、大家から安価で譲ってもらった。

下左：自作タイル全景
下中央：正面
下右：井戸端サロン（写真下中央が井戸）
右ページ：台所

◎エピソード

古い空き家の再生は、新築を建てるのとは全く違って、作業を始めてみないと分からない部分や、見えてこない部分がたくさんあります。特にこの空き家は長い間物置代わりにされていて、不要な家財道具が山のようにあり、それを全部移動させないと家の痛み具合が分からないほどでした。案の定、思った以上にシロアリ害がひどかったり、追加作業をしないといけない部分が多々あり、予定通りに工事も進みませんでした。残したかった味のあるモルタルの外壁も内部構造がかなり痛んでおり、安全性を考えてやむなく解体し、復元しました。また、一番驚いたのは、床下から古い井戸（1.1 メートル四方の石造り）が出て来た事で、サロンのスペースのど真ん中に位置したことから、思い切って井桁の石を床上のレベルまで持ち上げ、アクリルの透明の天板をつけ、井戸の内部が見えるテーブルとして活かす事になりました。今となっては、これがホントの井戸端サロンと言えますが、大きな重い石を人力で持ち上げる作業は本当に大変でした。現在では、部屋の中に井戸がある家という珍しさで、建物の見学に来る人もいるほどです。

そのような予想外の左官関連の作業が増えたため、予算に盛り込んでいなかった左官への謝礼が発生しました。

また、当初予定していなかった多くのアーティストの参加により、最後の仕上げが予想以上に凝ったものになったこともありがたい変更事項で、完成後も徐々に追加のアートの仕上げが加わっています。

団体設立経緯
尾道市で生まれ育った代表が、旅行会社の添乗員として外国を訪れるなかで、古い町並みを大切に守っているヨーロッパと日本のまちとの違いを実感する。代表は結婚を機に尾道に戻り、古民家を改装して民宿を営みたいと考えた。古民家を探す中で、地域の空き家の多さ（2008 年に市が行った調査によると、斜面市街地の 2213 戸のうち、約 12％の 257 戸が空き家だった）に衝撃を受ける。そして、映画のロケにも使われ、地域のシンボル的存在でもある空き家「通称尾道ガウディハウス」に取り壊しの話があることを知り、購入と再生を決意する。数奇屋大工の夫と少しずつ家を修理する過程をブログで紹介することで、自発的な空き家再生に多くの賛同者を獲得し、団体設立に至った。

◎私たち自身で活動を評価

今まで多くの空き家の再生に関わってきていますが（店舗、住居等併せて 10 軒以上、不用品の片付け作業や引越しの手伝いは 3 軒程度）、この物件が完成第 1 号となり、記念すべきものになりました。再生作業は予想以上に大変で予定どおりに進まない事が多く難儀しましたが、逆にそんな中で予想以上の多くの方々の手を借り、知恵を借り、仕上げていく事が出来、再生プロセスを重視した甲斐がありました。特に大学の関係者や幼稚園児、アーティストの人たちが、最後に多く関わってくれて、想像を絶する仕上がりになり、建物の価値を一層高める結果となりました。この建物の再生に 100 人を超える人の手が加わった事は、何よりも大きな収穫となりました。本職でさえ、古い家の工事は発掘作業のように少しずつ少しずつ進めていかないと難しいと言います。予定よりも時間がかかってしまったのは仕方ありませんが、余裕を持った年間のスケジュールをもう少し正確に組んでいれば、その後のイベント開催など、より効果的だったのではないかと思います。今後の課題としてこれからの活動に活かしていきたいと思います。

上：井戸端サロンでのママ教室の様子
中：ママミーティングの様子
下：子どもの日に兜を折る教室

公共施設と違って飲み食いできるのがうれしい。
サロンに集うママ・活用するママ達の声

◎私たちの“これから”

活動の結果、今後も「子づれママの井戸端サロン・北村洋品店」として、交流スペースの運営を続けていきますが、今回のノウハウを活かして、今後もワークショップ形式でリノベーションしたり、再生過程を多くの人と共有する事で建築や手しごとに関心を持ってもらい、古いものを活かしたまちづくりを主流にしていきたいと考えます。

今回の工事で発生した廃材や残った材料、古道具などを捨てずにストックしておき、他の再生物件に使えるようにしています。
また、今回のリノベーションでは、基本的な木工や左官作業のノウハウを職人から教えてもらいました。そのノウハウを活かして、多少の補修やリノベーションが各家々で行われ、古い家や空き家でも手を加えながら、長く住み続けようとする人が増えていけばと考えます。

様々なアイデアやアートの要素を取り入れる事によって、あるものを使って低コストにリノベーションできたり、空間をより一層楽しむ事ができるという事に気づく人が増え、建築や家づくりをより身近なものに感じてもらえればと思います。

尾道ガウディハウス
1930年代、瀬戸内海を見下ろす千光寺山の南斜面に、地元の大工が約3年がかりで建てた木造2階建ての民家。和館部と洋館部から成る。幾重にもせり出す飾り屋根、カーブ状の階段、細木細工の書院窓等細部に職人技が感じられる。高台に立ち、その職人技を凝縮した姿からスペインの大建築家にちなむ愛称がついた。家主が亡くなってから、25年以上空き家の状態が続いていたために、痛みも激しかった。2007年から再生を開始したが、現在も工事は続行中で、再生過程も公開されている。比較的傷みの軽かった和館部を活用して、ワークショップ、空き家談義等が行われている。建物全体が再生された後（時期未定）、貸しスペースや短期賃貸物件として開放する予定。

平成20年度実施事業

町並み保全のための空き家再生事業	・空き家再生作業 ・現地でチャリティ蚤の市 （傾斜地の空き家に放置された家財道具等のリユースを目的として、再生物件の現場で開催） ・尾道建築塾 ・空き家再生チャリティイベント （空き家再生の修復費用を捻出するため、それぞれの再生物件で様々なイベントを開催）
定住促進とコミュニティの確立を図る事業	・尾道空き家談義（尾道の空き家問題と関わりのあるゲストを招いて、情報交換を行う会） ・尾道暮らし応援作業（空き家バンク事業の先駆け※） ・空き地再生ピクニック（ピクニックを楽しみながら、斜面地に点在する空き地の活用方法を考える。草刈り、掃除から始め、手づくり公園や菜園、花畑など色々なアイデアで空き地を再生する計画）
新たな文化とネットワークの構築事業	・パネル展示会（移住者インタビュー、建築塾のルートマップ等を市役所のロビーや商店街の空き店舗に展示） ・尾道まちづくり発表会（市民に空き家問題に対する理解を深めてもらうために開催するシンポジウム） ・空きプレス（1年間の活動記録及び報告を兼ねたタブロイド紙）の発行 ・おのみち手しごと市（山手住民やアーティスト、モノづくり系の参加者が集う市）参加

※空き家バンク事業について
旧市街地の斜面地や路地裏などの不便な場所の物件に限り、平成21年度から空き家バンクを市から任される予定。これまでにも空き家や移住に関する問合せを多数受けてきた。少々不便でも尾道の暮らしを楽しみ、地域に密着して生活してくれる人を増やしていくことを目標としている。

家づくりの常識が変わった
（廃材や安い材料を駆使して使用していることから）。
空き家再生作業参加者の声